

〈論文〉

漢文教材としての杜甫「石壕吏」に対する王粲「七哀詩」の活用

栗山 雅央

要旨

本稿は、日本の「漢文」教育に用いられる教材に対して、これの理解を深化・促進させるための関連教材を新たに提案することを目指したものである。具体的には、現在「古典B」に載録されることの多い、中国の盛唐時代の文人である杜甫が創作した「石壕吏」を対象とする。そして、同じく中国の後漢末から三国時代にかけて活動した王粲の「七哀詩」を活用することで、「石壕吏」の学習活動の中にあられる諸問題に対する学習者の理解をより明確にできると考えている。こうした教育活動における関連教材の活用は、日本よりも中国の「語文」教育（日本の「国語」に相当）で活発である。そのため、議論の前提として「語文」教育の方法を援用しつつ、「七哀詩」の活用方法を提案していく。その上で、本稿ではまず杜甫「石壕吏」と王粲「七哀詩」の本文・書き下し文・日本語訳と作詩の背景を説明し、この二作品の共通点（主題・構成・表現）と相違点（作中に見える作者の心情の有無）を明らかにする。これら基礎的作業をもとに、実際に採用されている教科書に見える発問や学習活動を例として、王粲「七哀詩」との比較を通じたよりよい理解へと繋がる実践例を提示したい。無論、その際は平成30年告示の「高等学校学習指導要領」にも見える「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」にも結び付くよう配慮した。以上を通じて、限られた授業時間数の中で、教員の負担を増やすことなく、その教育効果を増大させる関連教材の活用方法を提示する。

一、研究の目的（従来の漢文教材に対する関連教材の開発）

日本の国語教育、とりわけ「漢文」に分類される教材は、その多くが中国の文人によって著された作品や書物に収められたものである。そして、当然のことではあるが、この「漢文」で学ぶ作品や文章は、日本の「国語」に相当する中国の「語文」教材の中にも含まれている。となれば、中国の「語文」教育で行われる教材研究や実践方法を日本の「漢文」教育と比較し、その長所を活かそうとするのは自然な流れだろう。

事実、「国語」と「語文」とを比較した考察もあらわれ始め、例えば林教子氏は、日中の教材間の共通性や、日中両国の教育政策の移行状況に着目した考察をしており、とりわけ近時の「学習指導要領」に見える「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」案を提示している^①。こうした取り組みには筆者も大いに賛同するものであり、本稿も意見を参考にしつつ考察を行ったつもりである。

さて、筆者は中国の「語文」教材の教育法を参考として、日本の漢文教育へ資する教育法や教材について議論を重ねてきた^②。そうした中で「語文」教育の中でしばしば見られる、主教材をより深く理解するために、主教材と同一テーマや同一作者の作品を中心とし

た関連教材を利用する方法がおおいに注目された。いま、具体例として人民教育出版社版『普通高中課程標準実験教科書 語文 必修』第4冊の第二単元に収録される蘇軾詞（「念奴嬌 赤壁懷古」「定風波」）に対する「研究討論と練習（原文「研討与練習」）」を挙げる③。

この二首（筆者注…「念奴嬌 赤壁懷古」「定風波」）と以前に学習したことのある「赤壁賦」はすべて蘇軾が黃州に左遷された時期に創作されたものである。試みにこの三篇の作品を比較し、これらが思想や感情の面でどのような異同があるか見てみなさい④。

これに対する「課題設定の意図（原文「設題意図」）」は次のように解説する。

学生が文学作品を学習する際に、彼（筆者注…蘇軾）の作品を特定の創作時期に位置付け、彼の生活の履歴と結び付けて作品の思想と芸術的価値を明確に理解するのを手助けする⑤。

つまり、ここでは本教材（「念奴嬌 赤壁懷古」「定風波」）と関連教材（「赤壁賦」）とが創作時期と作者の境遇の点で共通することに着目し、これら三作品の比較を通じて本教材のさらなる理解を目指しているのである。こうした同一のテーマや作者などに基づく関連教材を設定し、本教材のより深い理解へと結び付けようとする手法を、日本の漢文教育へ活かそうというのが本稿の大きな目的の一つである。

そこで本稿では、これまでも複数の「国語」教科書教材として採用されている杜甫の「石壕吏」を取り上げる。この「石壕吏」は中国の「語文」教材にも採られることから、同じく林氏により日中間の教授法を比較しての提言がなされている⑥。そこで、本稿では主題・構成・表現といった様々な観点から「石壕吏」と類似する関連教材を設定し、これとの対比を通じて主教材である「石壕吏」の理解を深める授業方法を模索していきたい。具体的には、後漢末の王粲が詠んだ「七哀詩」を活用するつもりであり、「石壕吏」と「七哀詩」を結び付ける提案自体はすでになされている⑦。

ところで、「学習指導要領」の掲げる「主体的・対話的で深い学び」の対極にあるものと言え、それは学習者が「受動的」で教師より「一方的」に展開される授業形態となろう。これを「漢文」に当てはめれば、作品本文を全体で音読し、書き下しを行い、教科書の語注にしたがって作品本文の日本語訳を行う、こうした「作品のみ」に終始した授業が容易に想像できる。これでは「主体的・対話的」授業の実現は望むべくもない。もちろん、音読や書き下しを行うことそのものの重要性は認めなければならないし、この価値は否定しない。ここで問題となるのは、「本文理解（解釈）」をどのような過程で進めていくのかということにある。そもそも解釈とは「多様性」を内包するものである。となれば、その多様性を許容しうる授業を構築していく必要があることは当然である。本稿で論じる関連教材の分析と授業案の提示は、こうした解釈の多様性を許容するものであり、これにより今後の「主体的・対話的」授業の実現の一助となれば幸いである。

二、杜甫「石壕吏」の本文、書き下し文、日本語訳と作詩背景

杜甫（字は子美、712～770）は、李白や王維と並び、盛唐時代に活躍した文人である。彼の詩は「詩史」と評されるほどに歴史が詠み込まれ、また詩の世界における聖人として「詩聖」とも呼ばれるほどに激賞されていた。こうした評価を獲得した彼の作品は、「国破れて山河在り（國破山河在）」で始まる「春望」や「江碧にして鳥は愈白く（江碧鳥愈白）」で始まる「絶句」など、日本人にもよく知られたものが多い。こうした作品の中に、所謂「三吏三別」と通称される一群の作品がある。これは「新安吏」「潼関吏」「石壕吏」、「新婚別」「垂老別」「無家別」の六首で成り立ち、これまで社会への批判的精神が込められた詩として高く評価されてきた。日本の「漢文」と中国の「語文」のどちらにも収録され、かつ本稿が主教材に設定する「石壕吏」はこの中の一首である。まず、「石壕吏」の本文、書き下し文、及び日本語訳を以下に挙げる。

暮投石壕村
有吏夜捉人
老翁踰牆走
老婦出看門
吏呼一何怒
婦啼一何苦
聽婦前致詞
三男鄴城戍
一男附書至
二男新戰死
存者且偷生
死者長已矣
室中更無人
惟有乳下孫
有孫母未去
出入無完裙
老嫗力雖衰
請從吏夜歸
急應河陽役
猶得備晨炊
夜久語聲絕
如聞泣幽咽
天明登前途
獨與老翁別

暮に石壕の村に投ず、
吏有り夜人を捉ふ。
老翁は牆を躰^こえて走り、
老婦は門を出でて看る。
吏の呼ぶこと一に何ぞ怒れる、
婦の啼くこと一に何ぞ苦しき。
婦の前^すみて詞を致^すすを聴くに、
「三男は鄴城^{まも}の戍り、
一男は書を附して至り、
二男は新たに戦死すと。
存する者は且^{しばら}く生を偷^{ぬす}み、
死する者は長^{とこしへ}に已みぬ。
室中に更に人無く、
惟だ乳下の孫有るのみ。
孫有りて母未だ去らざるも、
出入に完裙無し。
老嫗力衰へたりと雖も、
請ふ吏に従ひて夜帰せん。
急に河陽の役に応ぜば、
猶ほ晨炊に備ふるを得ん」と。
夜久しくして語声絶え、
泣きて幽咽するを聞くが如し。
天明前途に登り、
独り老翁とのみ別る。

(日暮れに石壕の集落に宿を取ったところ、その夜、役人が人を捕まえようとしていた。すると爺さんは垣根を越えて逃げ、婆さんが役人に應對しようと門の番をしていた。

役人の叫び声の、なんと怒気を含んでいることか、婆さんの泣き叫ぶ声の、なんと苦しげなことか。婆さんが役人の前に進み出て話す言葉にじっと耳を傾けた、「お役人さま、三人の息子は鄴城の駐屯地におります。幸いそのうちの一人の息子は人づてに手紙を寄りましたが、二人の息子は最近あった鄴城の戦で死んだとのこと。生きている者はなんとか生きながらえているだけでいつ死ぬとも知れませぬし、死んでしまった者は永遠にそのままでございます。

この家にはもはや男手がなく、ただ乳飲み子の孫がいるだけです。孫がいるので嫁はまだこの家から出て行ってはおりませんが、外出しようにもちゃんとしたスカートもございません。この老婆めは力は衰えてしまいましたが、どうかお役人さまとともに今夜にでも軍営に行かせて下さいませんか。急いで河陽の労役に駆けつければ、きっと朝飯を炊くくらいのことではできるでしょう。」

夜がふけて話し声も途絶えたが、嫁のむせび泣く声が聞こえたようだった。夜が明けるときになって再び旅路につく時、ただ爺さんとだけ別れを告げた。⑧)

石壕の集落へ夕暮れ時に到着した杜甫は、民衆を捕らえようとする役人、それから逃げる老人と役人の應對に努める老婆の姿を目にする。老婆は男手のない窮状を訴え、自分が戦役地に赴くことを提案する。夜中にむせび泣きの声が聞こえたようにも感じ、翌朝にはただ老人とのみ別れを告げて杜甫は集落を離れるというものである。

ここで作詩の背景を簡潔に説明する。この「石壕吏」を含む「三吏三別」詩はいずれも乾元二年(759)に創作されたとされる。杜甫は前年の乾元元年(758)に華州司功参军へと左遷されるが、在任中に洛陽へ赴いたり鄴城戦を目の当たりにしたりしている。唐王朝全体に目を転じれば、天宝十四載(755)から宝応二年(763)にかけて、安祿山や史思明による大規模な反乱(安史の乱)が起き、唐王朝の国力は弱まり、以後徐々に衰退の途をたどるようになった。この時、玄宗は楊貴妃とともに蜀へと逃げるが、途中馬嵬の地で楊貴妃と死別する。これは白居易によって「長恨歌」の中で二人の悲恋として描かれている。こうした王朝全体を蔽う不安の中、杜甫自身が実際に体験した凄絶な出来事が「三吏三別」詩の創作へと繋がっている。

教材としての「石壕吏」は種々の教師用資料などにも解説が施されているため詳細は譲るが、本稿で比較する王粲「七哀詩」との関わりから見れば、作者である杜甫がみずから体験した事件に基づき「石壕吏」が創作されたという点は押さえておく必要がある。

三、王粲「七哀詩」の本文、書き下し文、日本語訳と作詩背景

王粲(字仲宣、177～217)は、後漢末に主に曹操幕下において文学のみずからの武器として活躍した文人であり、所謂「建安七子」(王粲のほか、孔融・陳琳・徐幹・阮瑀・応瑒・劉楨)の一人に数えられる。

王粲が生きた後漢末は、長きにわたり中国を支配した漢王朝の最末期であり、混乱の極致にあった一時期である。後漢の中平元年(184)に「蒼天 已に死す、黄天 当に立つべし(蒼天已死、黄天當立)」を唱えて蜂起したことで知られる黄巾の乱が勃発し、後漢王朝は徐々に崩壊の道をたどってゆく。この動乱に乗じて一時に権力を掌握した董卓があらわれるが、こうした社会の混乱をきっかけに日本でも「三国志」としてよく知られる曹操や劉備、孫権の父である孫堅など後の三国を形成する群雄たちが表舞台にあらわれてくる。こうした社会の混乱が極めて激しかった一時期に、本稿が関連教材に設定する王粲の「七哀詩」は創作されている。

この「七哀詩」は、中国を代表する詞華集であり、日本の文学にも色濃い影響を与えた『文選』に現在は収められている。『文選』では、「七哀詩」の題目で二首が採られており、本稿で比較対象とするのは「其の一」である。まずは、以下に本文と書き下し文、日本語訳を挙げる。

西京 亂 無 象
豺 虎 方 遘 患
復 棄 中 國 去
遠 身 適 荆 蠻
親 戚 對 我 悲
朋 友 相 追 攀
出 門 無 所 見
白 骨 蔽 平 原
路 有 飢 婦 人
抱 子 棄 草 間
顧 聞 號 泣 聲
揮 涕 獨 不 還
未 知 身 死 處
何 能 兩 相 完
驅 馬 棄 之 去
不 忍 聽 此 言
南 登 霸 陵 岸
迴 首 望 長 安
悟 彼 下 泉 人
喟 然 傷 心 肝

西京 乱れて象無く、
豺虎 方に^{わざわ}患ひを遘す。
復た中国を棄てて去り、
身を遠くして荆蛮に^ゆ適ふ。
親戚は我^{むか}に対ひて悲しみ、
朋友は相ひ追ひて攀る。
門を出づるも見る所無く、
白骨 平原を蔽ふ。
路に飢ゑたる婦人有り、
子を抱きて草間に棄つ。
顧みて号泣の声を聞くも、
涕^{なみだ}を揮ひて 独り還らず。
「未だ身の死する処を知らず、
何ぞ能く 両つながら相ひ完からん」と。
馬を駆りて 之を棄てて去る、
此の言を聴くに忍びず。
南のかた霸陵の岸に登り、
首を迴らして 長安を望み、
悟る 彼の下泉の人の、
喟然として 心肝を傷ましむるを。

(西の都はあやめもわかぬ混乱のさなか、狼や虎が災いをなす今このとき。
ふたたび中原を棄て去って、この身は遠く南蛮の荆州へと逃れゆく。
親戚の者は悲しげにわたしを見つめ、友たちは引き留めようと追いつがる。

城門を出ればひととして目に入るものなく、ただ白骨が平原を埋め尽くす。
路傍には飢えた一人の婦人、抱いていた子を草むらに棄てる。
泣き叫ぶ声にふりかえるが、涙を払い、もどろうともせず一人去ってゆく。
「この身すら、いつどこで死ぬかわからないのに、二人そろって生き長らえるなんて
どうしてかないましょう」。
わたしは馬に鞭あて婦人を見棄てて去る。その言葉、聴くに忍びない。
南なる霸陵の高きに登り、首を回らし長安を眺めやる。
身にせまるのは、かの「下泉」の詩をうたった人の思い。ああ、この胸底を抉る嘆きの
痛ましさ。⑨)

作詩の状況と内容の概説は『文選詩篇（二）』の解説によくまとめられているので、これを引用する。

後漢末の初平四年（一九三）、王粲は長安の動乱を避けて荊州の襄陽に赴く。先立って専横を極めた董卓は、軍閥の圧迫を逃れるため都洛陽を焼き払い長安への遷都を強行するが、王允や呂布らによって誅殺される。ほどなく董卓の武将李傕・郭汜らが長安に攻め入り、実権を奪い返す。朝廷の権力闘争や軍閥の角逐により混乱を極める長安を脱出した王粲は、祖父王暢の弟子であり、荊州の長官をつとめていた劉表のもとに身を寄せる。このとき王粲は十七歳。

「其の一」は長安を発つ際、戦乱による国の荒廃ぶりを目のあたりにして湧き起こる悲しみをうたう。戦乱の荒廃をうたう詩は多く書かれているが、そのなかでもこの詩は傑出した位置を占める。特に、生きるために我が子を棄てる女性をうたった詩句は、等身大の個人の悲劇を表現しえている点で他に類を見ない。この詩には「棄」字が三度繰り返し用いられる。中原を棄てる王粲、我が子を棄てる女性、かけがえのない対象をやむなく棄てるという点において二人の境遇は重なり合い共鳴する。しかし王粲は結局この女性を見棄てて去って行かねばならない。こうして繰り返し述べられる「棄てる」ことの悲しみ、傷みが末尾の詠嘆へと絞りあげられてゆく⑩。

このように見ると、杜甫「石壕吏」と王粲「七哀詩」とは、その創作された時代こそ約560年もの隔たりがあるものの、かたや安史の乱に、かたや黄巾の乱と続く董卓の横暴に作詩のきっかけを持ち、社会の混乱を背景とした民衆の悲しみを描き出す点で共通する。無論、このことだけが「七哀詩」を比較対象に選んだ理由では無いが、こうした共通点を明確に提示できることは、授業現場において学習者に対してより自然に関連教材を受け入れてもらう上で重要なことであるように思う。

四、「石壕吏」と「七哀詩」の共通点と相違点

前節で述べたように、「石壕吏」と「七哀詩」は作詩の背景にいずれも動乱にともなう

社会の不安定な状況があったが、作品そのものを比べてみてもやはりいくつかの共通点を見出すことができる。同時に、各作品に固有のものでもある相違点も認めることができる。そこで、以下にこの共通点と相違点とを各作品の本文を比較しながら分析する。

(1) 共通点 (主題・構成・表現)

・主題

「石壕吏」と「七哀詩」の共通性は、まずどちらも戦乱にともなう社会の混乱を背景に持つことに起因する、作中での社会批判であろう。「石壕吏」には、直接に批判を示す字句はあらわれないが、役人に対する老婆による窮状の訴えの後に展開される作品の結末部分が、これを象徴的に描き出している。また、「七哀詩」も結末部分に集中的に王粲の感情の吐露を通じて展開される (傍点は筆者による、以下同じ)。

夜久語聲絶
如聞泣幽咽
天明登前途
獨與老翁別

夜久しくして 語声絶え、
泣きて幽咽するを聞くが如し。
天明 前途に登り、
独り老翁とのみ別る。

(「石壕吏」)

南登霸陵岸
迴首望長安
悟彼下泉人
喟然傷心肝

南のかた霸陵の岸に登り、
首を廻らして 長安を望み、
悟る 彼の下泉の人の、
喟然として 心肝を傷ましむるを。

(「七哀詩」)

「石壕吏」は杜甫みずからの感情が吐き出されず、夜更けのむせび泣きが聞こえたような気がする状況と、翌朝の出立にあたってただ老人とのみ別れを告げるという事実を淡々と述べるだけである。しかし、これは直前の老婆の役人に向けた言葉を受けてのものであり、老婆がまもなく連行される、あるいは連行された状況を暗示するものであり、却って民衆が抱える悲惨を雄弁に物語る。一方、「七哀詩」は常に動作の主体が作者である王粲となっており、王粲自身がかつて善政を敷いた漢の文帝の陵墓の岸から都長安を眺め、そこで導かれる思いを「悟・喟然・傷」といった感情をともなった字句で述べる。すなわち、「下泉」の歌を詠った人に思いをいたし、そこで深いため息とともにやはり内臓を抉られるかのような悲しみや苦しみが吐き出されるのである。「下泉」とは、『詩経』曹風に収められ、その小序は作品を次のように理解する。

下泉、思治也。曹人疾共公侵刻下民、不得其所。憂而思明王賢伯也。

下泉は治を思ふなり。曹人は共公の下民を侵刻し、其の所を得ざらしむるを疾む。憂へて明王・賢伯を思ふなり。

これは曹人が共公の圧政に対して憂悶を示し、賢明な君主の出現を願うことを詠ったものだと理解できるが、「七哀詩」もこれと同じく、現実の政治状況、とりわけ董卓による暴政へ向けた批判が込められたものと理解できよう。

以上、「石壕吏」と「七哀詩」とは、作品内での手法こそ異なるものの、どちらも社会に向けられた批判、とりわけ為政者に対する批難を作品の中に入れておき、しかもこれはすべて作品の最も主張したい内容となっている。この点で、二作品は主題を同じくするものと判断してよい。

・構成

こうした主題の共有のほか、作品の構成にも類似点を認めることができる。まず、「石壕吏」の構成を示す。

第1句「暮投石壕村」～第4句「老婦出門看」…舞台の設定（杜甫による石壕集落への到着）の提示

第5句「吏呼一何怒」～第20句「猶得備晨炊」…台詞の前提（役人と老婆のやりとり）と被圧政者（老婆）による台詞

第21句「夜久語聲絶」～第24句「獨與老翁別」…台詞を受けての状況（夜更けのむせび泣きと翌朝の老婆不在での老人との別れ）の説明

ついで、「七哀詩」の構成を示す。

第1句「西京亂無象」～第8句「白骨蔽平原」…舞台の設定（動乱にともなう王粲の長安からの避難）の提示

第9句「路有飢婦人」～第14句「何能兩相完」…台詞の前提（路傍での婦人による我が子の放棄）と被圧政者（婦人）による台詞

第15句「驅馬棄之去」～第20句「喟然傷心肝」…台詞を受けての状況（王粲によるその女性の放置）の説明とそれに対する作者自身の心情（乱世に対する憂悶と平和の到来の希求）の表明

このように見ると、これら二作品は「七哀詩」の最後に作者自身の心情が表明されるほかは、ほとんど類似した構成になっていることがわかる。ここで注目すべきは、このどちらでも被圧政者の言葉が作品中に直接引用されている点である。「石壕吏」では第8句「三男鄴城戍」から第20句「猶得備晨炊」にかけて、息子たちの現況ともう男手のないことの説明、そして代わりに老婆自身が戦役地で飯炊きに励むことの提案をし、この台詞を転換点として、夜更けと翌朝へと場面が移り変わってゆく。

一方、「七哀詩」に見える婦人の台詞も作中において非常に強い意味合いを備えている。

未知身死處
何能兩相完

未だ身の死する處を知らず、
何ぞ能く 両つながら相ひ完からんと。

(「七哀詩」)

泣き叫ぶ我が子は恐らくはまだ自分で歩くこともできないほどに幼かったであろうが、この幼子を草むらに棄てざるをえなかった婦人の嘆きはとても胸に突き刺さるものがある。私一人ですらどう生きていけばいいかわからないのに、子供と二人でどうして身を保つことができるでしょうという言葉は、まさしく「等身大の個人の悲劇を表現」したものであり、この点においてやはり「石壕吏」の老婆の台詞と性格を同じくするものだと言えよう⑩。

では、こうした作中の登場人物の語りを、杜甫の別の作品から見出せるかと言えば、実は「三吏三別」の「新安吏」や「潼関吏」にも見出すことはできる。しかし、それは「石壕吏」とは異なる性格を持つものとなっている。

借問新安吏
縣小更無丁
府帖昨夜下
次選中男行

新安の吏に借問すれば、
「県は小にして更に丁無し。
府帖は昨夜下る、
次選中男行く」と。

(「新安吏」)

(新安の役人に聞いてみたところ、「新安県の規模は小さく、『丁』に当たる成年の男性がもういないのだ。軍の役所から昨晚ここに徴兵名簿が届いたので、『丁』に次いで若い『中男』を選んで出征させるのだ」という。⑪)

借問潼關吏
修關還備胡
要我下馬行
爲我指山隅
連雲列戰格
飛鳥不能踰
胡來但自守
豈復憂西都
丈人視要處
窄狹容單車
艱難奮長戟
萬古用一夫

潼関の吏に借問す、
「関を修めて還た胡に備へるか」と。
我に要めて馬より下りて行かしめ、
我が為に山隅を指す。
「雲に連なりて戦格を列すれば、
飛鳥も踰ゆる能はず。
胡来たれば但だ自ら守る、
豈に復た西都を憂へんや。
丈人 要處を視よ、
窄狭にして單車を容る。
艱難ありて長戟を奮へば、
萬古一夫を用うるのみ」と。

(「潼関吏」)

(私は潼関の役人にちょっと尋ねてみた、「潼関を補修してまた賊軍に備えるのですか」、と。すると官吏は私を馬から下ろして歩かせ、私に山のすみずみを指し示してくれた。

そして役人は次のように答えた。「雲に連なるほどの防御柵を並べれば、空を飛ぶ鳥でさえ越えることができないでしょう。

賊が来ても堅守できますから、どうして西の都長安について心配することがありません。あなたがじっくりとこの要害を御覧なさい。狭くて車一台しか通れません。万が一敵の襲来があったとしても長いほこを振り回せば、永久に一人の兵士だけで守り通せるほどです」、と。⑬)

「新安吏」は杜甫の問いかけに対する役人の返答として、新安県ではすでに兵が足りないことと具体的徴兵手段とを説明する。また「潼関吏」も潼関を補修し賊軍に備えるのかと尋ねる杜甫に対して役人が回答しており、潼関の堅牢さを盛んに強調する様子が描かれる。つまり、これらはどちらも役人（体制）側の言葉であり、民衆（被圧政者）側の言葉ではなく、この点で「石壕吏」の老婆の台詞とは性格が異なるのである。一方、「新婚別」「垂老別」「無家別」の所謂「三別」詩は、作中はすべて民衆の側に位置するある人物による表白として描かれてはいる。しかし、それは実際には作者である杜甫が彼らに「なりかわって」詠じたもので、やはり直接の言葉が作中に引用されるものではない。この点で「石壕吏」の老婆の台詞とはやはり異なっている。

以上、これら二作品の構成は同様であり、かつ民衆（被圧政者）側に属する人物（「石壕吏」の「老嫗」と「七哀詩」の「婦人」）の思いが作中で直接に表明されるという同様の特徴を持つことが理解されよう。

・表現

最後に表現面での共通性について、二作品でいずれも「聴」と「聞」の二字が用いられる点を指摘したい。これは一見すると些細な指摘であり、あるいは不要に感じられるかもしれない。しかし、従来の教科書で行われる発問をより深く理解するために必要と思われるため、あえてここに指摘したい。以下に該当箇所を示す。

聽 婦 前 致 詞
三 男 鄴 城 戍……
夜 久 語 聲 絶
如 聞 泣 幽 咽

婦の前みて詞を致すを聴くに、
「三男は鄴城の戍り、……
夜久しくして語声絶え、
泣きて幽咽するを聞くが如し。

（「石壕吏」）

顧 聞 號 泣 聲
揮 涕 獨 不 還……
驅 馬 棄 之 去
不 忍 聽 此 言

顧みて号泣の声を聞くも、
涕を揮ひて独り還らず。……
馬を駆りて之を棄てて去る、
此の言を聴くに忍びず。

（「七哀詩」）

この「聴」と「聞」とは、端的に言えば、動作主体の意識の有無で区別される字であり、

「聴」は「(意識的に) 聞く、耳を澄ませる」、「聞」は「(無意識的に) 聞こえる、耳に入ってくる」といった意味で理解できる。では、以下で「聴」と「聞」の二作品での用いられ方を確認しよう。

「聴」について、「石壕吏」は老婆が役人の前に進み出て話す内容に、杜甫が意識的に「耳を傾ける」のであり、だからこそ「三人の息子たちは鄴城の守備に就いていて云々」といった老婆の台詞を作中で克明に写し取ることができたのである。また、「七哀詩」で王粲が「聴」いたのは「此の言」に集約される婦人の嘆きである。これに「耳を傾ける」ことに我慢ならなかったからこそ、王粲は馬を駆って婦人をその場に棄て去るしかできなかったのである。これらは「意識的に言葉に耳を傾けようとする」点で共通している。

一方、「聞」について、「石壕吏」では夜が更けて語らいの声がなくなり、静寂の中でむせび泣いているのを、杜甫自身の夢うつつの状態での無意識的動作の中で「聞こえたような気がした」のである。そして「七哀詩」も婦人を動作の主体として、草むらに棄てた幼い我が子の泣き叫ぶ声が望むと望まずとに関係なく、婦人の耳に「聞こえてきた」のであって、後ろ髪を引かれつつもなお流れ落ちる涙を払って我が子のもとへ戻りはしないのである。これらに共通するのは「意識せずとも聞こえてくる」という意識の範囲外での音声の認識である④。

これらは作品内の特徴的な修辞と言えるものではない。謂わば基本的な字の理解の範囲内に収まるものである。その点で、こうした差違は確かに些細なものではある⑤。しかし、こうした一字一字への確かな理解は、「高等学校学習指導要領」の「国語」の目標にも見える「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力」の育成にも繋がっていくのではないだろうか。先にも述べたが、現在の「漢文」教育は、ともすれば全体での音読と書き下し文・日本語訳の確認で終わってしまうことも少なくないように感じられる。授業時間数に制限があるために、これを一概に批難することはできないが、それでもなお漢詩という限られた文字数に込められた文人の意図を深く読み解こうとする意識と、それを目指した授業展開を目指していかなくてはならないだろう。

以上、「石壕吏」と「七哀詩」には相互に共通する性質を備えていることが明らかであり、「七哀詩」を対照することで、主教材である「石壕吏」本文のより深い理解へと学習者を導くことができるように思われる。

(2) 相違点 (作者自身の感情の表明の有無)

ここまで述べてきたように、「石壕吏」と「七哀詩」には多くの共通点が認められる一方で、決定的に異なる点もある。それはほぼ唯一にして最大の違いであり、先にこの二作品がいずれも社会への批判を込めていることを指摘したが、その表明の方法に明らかな相違があるのである。すなわち、「石壕吏」の中で杜甫はみずからの心情をほとんどあらわにすることははないが、その一方で「七哀詩」では王粲の心情がはっきりと作中に詠み込まれているのである。こうした、作者みずからの思いを作品中に表明するかどうかにおいて、この

二作品には決定的な相違がある。以下に、二作品中の心情が直接に読み取れる箇所を挙げる。

吏 呼 一 何 怒
婦 啼 一 何 苦

吏の呼ぶこと一に何ぞ怒れる、
婦の啼くこと一に何ぞ苦しき。

(「石壕吏」)

驅 馬 棄 之 去
不 忍 聽 此 言……
悟 彼 下 泉 人
喟 然 傷 心 肝

馬を駆りて 之を棄てて去る、
此の言を聴くに忍びず。……
悟る 彼の下泉の人の、
喟然として 心肝を傷ましむるを。

(「七哀詩」)

「石壕吏」では、役人の怒りの激しさと老婆の泣き声に対する苦しさが、杜甫の感想として述べられるのみである。これは続く老婆の台詞を効果的に導き出す効果を持つものではあるが、作品の中心を占める表現とは言いがたい。

一方、「七哀詩」は、特に詩の後半に集中して王粲の心情が吐き出されている。「忍びず」とは「我慢できない、耐えられない」の意味であり、繰り返すことになるが、ここでは我が子を棄てざるをえなかった母親の、一人でも先行きが見通せない中、子供と二人での生活が思い描けない絶望からくる嘆き、これを聞くに堪えられないという、王粲自身の痛切な思いが読み取れる。また、「喟然」とは「深くため息をつく様子」を意味し、「心肝を傷ましむ」は「みずからの身中を傷つけられる」といった意味となり、群雄割拠の後漢末にあつて戦乱に翻弄される民衆を目にした王粲のやるせなさにも似た感情を読み取ることができよう。

こうした作者の心情がどれだけ作中に詠み込まれるかは、作品単体の読解で学習者に理解させることはかなりな困難をとまうであろうし、理解できない学習者が多くを占めた場合などは教師側からの一方的な解説で終わることも少なくなかろう。比較対象として「七哀詩」を用いることで、「石壕吏」の中で杜甫が展開する社会批判の特徴を学習者に体感させることができるのではないかと予想される。

五、現行の教科書内容に対する「七哀詩」の活用実践例

前節で「石壕吏」と「七哀詩」の共通点と相違点を分析したが、これらが教科書の学習活動にどれほど活用できるのか。以下に、実際に採択されている教科書に見える学習活動を対象に、「七哀詩」を活用した実践の具体例を示すことにする。

活用実践例の提示に際しては、学習者に向けて関連教材をどのような形式で、どの段階で提示するかという問題が生じる。これについては、学習者如何で千差万別であるために画一的な提示は避けねばならないが、本稿ではひとまず本文・書き下し文・日本語訳と創作の背景をすべて書きあらわしたものを、主教材である「石壕吏」の読解前に学習者に提示するものとして考察を進める。そもそも、現在の限られた授業時間の中で関連教材その

ものの読解はほとんど不可能であろう。また「石壕吏」の読解終了後に関連教材を提示することは、その学習効果をはっきりするかがわからない。事前に関連教材を配布した上で、学習者への予習を指示する段階で、関連教材である「七哀詩」との共通点や相違点を考えさせておくことが、本教材である「石壕吏」の円滑な理解に結び付くと考えるためである。

なお、「石壕吏」が一般に収録される「古典 B」は、主に高校2年次以降に用いられることが多いため、本稿でも高校2・3年次を対象に想定して論を進める⑥。

(1) 「泣幽咽」の主体について

従来、「石壕吏」の学習活動の一つとして、第22句「泣きて幽咽するを聞くが如し」の「泣きて幽咽（むせび泣く）」したのが誰かを問うものがある。これについてはすでに前掲の林氏の先行研究でも取り上げられ考察がなされている。この動作の主体に対する従来の解釈にはずれがあり、林氏の解説に従えば、次のようになる⑦。

- ・孫の母（＝息子の嫁）ひとり
- ・孫の母と老婦
- ・孫の母と老翁
- ・老婆と別れを惜しむ家族（または、老婆が連れ去られ、残された家族）

このように解釈が割れる点について、林氏は「結局、詩人の「如聞（聞くが如し）」、つまり「聞いたような気がした」という姿勢が多様な解釈を可能にしているのである」と結論づける。事実、こうした説明は、第四の選択肢を採る筑摩書房『古典 B』の教師用資料の「泣幽咽」の解説にも「「如聞」の二字が効果的により幅のある解釈を可能にしている」と見えることから、一定の理解は得られよう。この理解そのものに問題はないが、これを実際の授業の場で説明することは、学習者に紋切り型の印象を与えることに繋がりやすいのではないか。「如聞」、とりわけ「聞」字の正確な理解こそが、こうした解釈の多様性をもたらすことを学習者に体感させる必要があるように思われる。

では、先に挙げた筑摩書房版では「如聞」をどのように解説しているのか。同じく教師用資料より挙げる。

聞いたようである。聞いた気がする。

「聞」の主体は作者、作者が次第に眠りに落ちていく中で耳に入ってきたことを表現しているものと考え。第七句の「聴」とは区別して用いられていることに注意。

ここで「聴」との区別を指示するため、同じく「聴」の項も挙げる。

意識してきく、注意してきく。一般に無意識的に耳に入ってくる意の「聞」と区別して用いる。二十二句目の「聞」と明らかに区別して用いられている。

これらの解説からは、「聴」は意識的で「聞」は無意識的であり、この二字は明確な区別が必要であることが主張される。この点については、教師用資料の発問例にも「「聴」と「聞」には、どのような違いがあるか」とあるし、解答例にも次のように明示される。

「聴」は意識して耳を傾けて聴いているのに対し、「聞」は意識せずに自然に耳に入ってくるのを聞いている。

ここでもやはり、意識と無意識の差を「聴」と「聞」の区別の根拠とする。筆者もこうした理解そのものには同意するし、作品を読解する上では当然学習者の理解すべき内容であると思う。しかし、ここであえて問題にしたいのは、こうした区別を「どのように学習者に理解させるのが最適か」という点である。上に述べたような区別を仮に教員が一方的に説明するだけでは、学習者の「主体的」な学びにはならないし、それが「対話的」でないことは明らかであろう。また、この「石壕吏」のみに依拠して区別を意識させることも可能ではあるが、単独の用例を判断基準とすることには慎重を要するだろう。ここで効果を発揮するのが、本稿が重視する関連教材であり、具体的にはこれまでに比較してきた王粲の「七哀詩」なのである。

具体的な分析内容は前節に譲るが、二作品を対比することで「石壕吏」の用例のみを判断材料とするよりも格段に学習者の「主体的」理解へと結び付けることができるのではなかろうか。そして、この比較を通じて「聴」と「聞」の字義を理解させた後に、「石壕吏」の第22句「泣きて幽咽するを聞くが如し」の動作の主体が誰を指すのかという冒頭の問いへと進むのがよかろう。ここでは、当然複数の回答が学習者より挙げられようが、「聞」が「無意識的に聞こえてくる」ことを理解していれば、あとは「如（ごとし）」を説明するだけでよい。そうすることで、「如聞」が無意識的にかつ曖昧さをともなう動作であることが容易に導き出せ、こうした解釈の多様性を無理に一つへと収斂させる必要も無くなるように思われる。

筆者は大学の教職科目の一つとして「漢文」を講じたことがあるが、その際に学生に作品の解釈とは一つに決められるものではなく、多様性をともなうものだと伝えるようにしている。そうすると、学生の多くは驚きとともに高校時代の漢文の授業では、作品を読解する際に一つの決まった訳を教えられてきたと言う。これらは定期考査での問いの設定の関係などもあり、ある程度は仕方のないことではないかと思う。しかし、過度に一つの解釈へと恣意的に導いていくことは、漢文、ひいては文学そのものの楽しみを失うことにも繋がっていくのではなかろうか。ここでの「泣幽咽」の主体を尋ねる問いも、例えばある解釈に限定したとすると、他の解釈を選択した学習者は疑問に思うだろうし、いざその疑問を提示された場合には、教員側も十分な回答を示すことは非常な困難がともなうだろう。

いま、定期考査の問いを話題に出したが、ここで示した解釈の多様性は問いとして設定するのに不適当だと思われるかもしれない。しかし、実際にはそのようなことはなく、「何故、「泣幽咽」の動作の主体には複数の解釈が成立しうるのか」ということを問えばいい

のであって、その解答は「直前の「如聞」が無意識的で曖昧さをともなう動作であるため、杜甫みずからが誰の動作であるかはっきりと認識できていないため」といったもので必要十分であろうかと思う。教員側も、無理にただ一つの解答しか無いものを求めるのではなく、解釈には多様性があるということを意識し、それを許容できるような発問を行っていきけるよう努めていけばいいように思われる。

(2) 「石壕吏」の主題について

どのような教材も、その教材そのものの主題を正確に捉えることは、重要な学習活動の一つである。例えば筑摩書房版では、読解の中で、「「石壕吏」の詩で、作者が訴えたかったことは何か、話し合いなさい」という問いが課され、これは主題の理解を問いかけたものであろう。こうした作品の主題について、いくつかの教科書の該当箇所を例に挙げる。

石壕村で見聞した、戦争のために徴発される過酷で悲惨な人民の実態をうたったもの
(東京書籍版)

石壕村に投宿した作者が、戦乱のために大切な働き手を次々と奪われてしまう民衆を見て、その苦しみ悲しみを詠じた詩

(教育出版版)

杜甫が石壕を通り過ぎたときに見聞した悲劇を取り上げて、老翁・老婦までも戦場に駆り立てる徴兵の苛酷さ、為政者の失政に対する痛烈な社会批判の思いを詠じた詩

(大修館書店版)

戦乱による民衆の悲惨と政治の苛酷

(筑摩書房版)

以上を総合するに、「石壕吏」の主題は、苛酷な徴兵にともなう人民の悲惨さであり、そこに込められた杜甫の意図は「痛烈な社会批判」ということになろう。これらはもちろん「石壕吏」本文の読解活動を通じて獲得できるものではあるが、それはこの「石壕吏」内で杜甫が描き出す種々の状況から判断されるものである。いま、「種々の状況」と限定的な表現を用いたが、これには明確な理由がある。すなわち、この「石壕吏」の中で杜甫が描き出すのは、石壕の村への宿泊と役人による民衆の拿捕、そして老婆の役人に向けた言葉と、夜半と翌朝の状況の描写のみであり、杜甫みずからの感情はほとんどあらわれないのである。この点について、大修館書店版は明らかな発問としては設定していないものの、学習者への注意を次のように呼びかけている。

杜甫が傍観者の視点に立って、この一家離散を見つめていることに気づかせる。

淡々としていながらも、その中に例えば「存者…、死者…」の二句や、結びの四句のように、言外に深い詠嘆や、痛憤のひびきを込めた表現のあることを見逃すことのないようにしたい。

ここに見える「傍観者の視点」は、他の出版社の教科書でも教師用資料の観賞の中で取り上げられており、これは「石壕吏」の一つの特徴と言える^⑩。では、こうした特色を学習者に認識してもらうにはどのような方法が考えられようか。

ここで、筆者は改めて関連教材である「七哀詩」との比較が効果を発揮するのではないかと考えている。すなわち、前節で「石壕吏」と「七哀詩」の相違点を述べたが、「七哀詩」を事前に学習者に提示しておくことで、学習者個人での作品間の比較が期待され、これにより作者の心情が作品内であらわれるかどうかという点での違いを、学習者みずから自覚的に理解できるようになるのではないかと考えられる。もちろん、「七哀詩」を紹介する際に、結末部分に触れた上で作者である王粲の心情が明示されていることを解説しておくなどの誘導は必要である。あるいは、「七哀詩」の中で感情をとまなう字句を事前に説明し、同様に「石壕吏」の中で感情を読み取れる字句があるかどうかを考えさせてもいいかもしれない。そうすれば、おのずと杜甫が「石壕吏」で用いた手法が「七哀詩」と異なることが体感できるように思われる。

以上、漢文教材としてしばしば用いられる「石壕吏」について、関連教材としての「七哀詩」の活用実践例を提示してきた。そもそもある作品を読解する場合には、作品内に用いられる表現に関する用例やその作品が収められる書物の注釈など、「作品の外部」にあるものを活用することで「作品の内部」へと迫っていきることが多い。とりわけ「漢文」はその傾向が顕著であるが、翻って現在の「漢文」教育を眺めてみれば、教科書下の細かな字句の説明が中心で、用例などに対する意識は低いように思われる。もちろん、逐次用例を挙げていっても煩雑になるばかりで、授業の構築に障害をきたす場合が多いであろうが、関連教材を厳選して学習者に紹介しながら主教材の理解を進めていくことは、むしろ自然な読解方法であるように思われる。また、作品間の比較を行うということは、学習者に対して主体的に作品と向き合うように促すことにも繋がる。本稿でも分析したように、作品間の共通点や相違点を明らかにしながら読解活動を進めていくことで、従来型の授業よりは明らかに学習者からの意見や考えの表明が期待されるだろう。

何れにせよ、関連教材を用いることにより、従来のものであれば教員側からの一方的かつ紋切り型の授業となりがちな漢文において、「主体的・対話的な授業」への取り組みへと繋がる可能性は十分に想定されてよからうし、その一端は本稿での「石壕吏」と「七哀詩」の対比を通じた授業案の提示によって明らかになったのではなかろうか。

注

- ① 林教子『『国語』と『語文』における教育課程の比較・研究—漢詩教材を中心に—』（『早稲田教育評論』第32巻第1号、2018年）を参照。
- ② 日本学術振興会の科学研究費基盤研究（C）「中国の古典教育における関連教材の研究—日本の漢文教育への応用のために—」（2020～2022年度、研究代表者：土屋聡）に関わる研究課題であり、本稿の内容もこの中での議論より啓発を受けたものである。

- ③ 人民教育出版社課程教材研究所ほか編著『普通高中課程標準実験教科書 語文 必修』第4冊（人民教育出版社、2006年）を参照。
- ④ 前掲注③著を参照。原文は次のとおり。
 这两首词和以前学过的《赤壁赋》都作于苏轼被贬黄州期间, 试将这三篇作品比较一下, 看看它们在表达思想感情方面有什么异同
- ⑤ 人民教育出版社課程教材研究所ほか編著『普通高中課程標準実験教科書 語文 必修 教師教学用書』第4冊（人民教育出版社、2007年）を参照。原文は次のとおり。
 帮助学生明确, 学习文学作品, 要懂得把他的作品放在特定创作时期里, 结合他的生活经历理解作品的思想和艺术价值。
- ⑥ 林教子「日中共通漢詩教材の比較研究—杜甫「石壕吏」を中心に—」（『早稲田教育評論』第33巻第1号、2019年）を参照。前掲注②林氏論文にも、一部「石壕吏」に関する分析が含まれている。
- ⑦ 漢詩・漢文教材研究会編『漢詩・漢文解釈講座 第1巻 漢詩 I 古詩・初唐』（昌平社、1995年）に王榮「七哀詩」が挙げられ、その中の授業案事例の「まとめ」に、「戦乱の世を嘆く詩として、どのような作品があるか。例えば杜甫には、どのような詩があるか」という発問があり、具体例として「兵車行」や「石壕吏」が挙げられている。
- ⑧ 下定雅弘・松原朗編『杜甫全詩訳注（一）』（講談社、2016年）の該当作品の日本語訳を参照。なお、本文は清の仇兆鰲注『杜詩詳註』（中国古典文学基本叢書、中華書局、1979年版）によった。
- ⑨ 川合康三・富永一登・釜谷武志・和田英信・浅見洋二・緑川英樹『文選詩篇（二）』（岩波書店、2018年）の該当作品の日本語訳を参照。なお、本文は『宋尤袤刻本文選』（国学基本典籍叢刊、国家図書館出版社、2017年版）によった。なお、第11句目「顧見號泣聲」の解釈について、ここでは「泣き叫ぶ声にふりかえるが」とするが、「聞」を意識させる場合は、「泣き叫ぶ声が聞こえたのでふりかえるが」と補うとよい。
- ⑩ 前掲注⑨川合氏ら著を参照。
- ⑪ なお、この婦人の台詞には現代社会にも通じる普遍性を見出すことができよう。後漢末の「戦乱」を現代社会における「貧困」に置き換えたとき、婦人の嘆きはより真に迫るものとなるように思われる。古典の教材とはなにもその時にしか通用しない内容を述べているのではなく、そこで描かれる人々の心情というものは大なり小なり現代の私たちの心情にも通じるものがあるのである。こうした古典作品中にみえる普遍的な心情を授業展開時には注意しておく必要がある。
- ⑫ 前掲注⑧下定・松原氏著を参照。
- ⑬ 前掲注⑧下定・松原氏著を参照。
- ⑭ あるいは、ここで孟浩然「春暁」の第2句「处处啼鳥を聞く（處處聞啼鳥）」を提示してもいいかもしれない。これも作者の孟浩然が室中であって鳥のさえずりが「聞こえてくる」ことを詠っている。

また、この「聴」と「聞」の区別は、例えば四書の一つである『大学』に見える「心

焉に在らざれば、視れども見えず、聴けども聞えず、食へども其の味を知らず（心不在焉、視而不見、聴而不聞、食而不知其味）」なども理解に有効だろう。ここでは、心がしっかりと保たれていないと、じっと聞いても聞こえないという。この「聴」は明らかに「意識的に耳をすます」の意味で理解できるし、「聞」も「耳に届く」といった意味であることが知られよう。

⑮ こうした区別は、この二字を用いた熟語を挙げることで容易に理解することができる。例えば、「聴」には「傾聴」や「視聴」があり、これらはどちらも動作主体がみずから進んで行くものである。また、「聞」には「伝聞」や「醜聞」があり、これらはどちらもどこからともなく聞こえてくるものである。こうした熟語を考えさせることは、授業内のわずかな時間で行えるものである。こうした課題によって、文字の理解や作品をより深く読み解くことに繋がっていくように思われる。

⑯ 本稿で用いた教科書は次のとおり。

- ・東京書籍『精選 古典 B 漢文篇』（古 B332）
- ・教育出版『精選 古典 B 漢文篇』（古 B337）
- ・大修館書店『古典 B 改訂版 漢文篇』（古 B340）
- ・筑摩書房『古典 B 漢文篇 改訂版』（古 B349）

⑰ 前掲注⑥林氏論文を参照。

⑱ 教育出版版の観賞は次のとおり。

この詩において、作者は自ら見聞した事実を克明に描写するのみで、感想というものを全く加えていない。……作者は、夜中のうちに逃げ帰ってきた老翁に別れを告げるだけである。感情は抑制され、あくまで体験した事実を淡々と述べるのみである。

東京書籍版の観賞は次のとおり。

ただ、杜甫はこの詩で、自己の主張を前面に押し出すという方法をとっていない。……また、なまじっかな同情の言葉をかけることもできない厳しすぎる現実が自身を終始傍観者としての立場に置き、主観を排除して、冷静に客観的に見たまます述べるという方法をとらせたのである。

筑摩書房版の観賞は次のとおり。

このうたの特色は何よりも語り手が傍観者であることに徹する、その語り方にある。……語り手は目に映ること、耳に入ることとして受動的に叙述するばかりで、通常の語り口であれば語られるはずの、それぞれの行為、出来事が持つであろう目的、理由、因果関係などは一切述べられない。

このように、いずれも「傍観者」として杜甫が作品に相対していることを述べるが、これを「石壕吏」の作品内部からだけで十分に理解させることはやはり困難であろう。特色とは比較対象があってようやく特色として成立するのであるから、その場合にはやはり適切な比較対象を設定した上で、学習者に組み込んでもらう必要があるのではなからうか。

・本研究は JSPS 科研費 20K02886 の助成を受けたものです。